

# ロシアを考える(試論3)

玉田 樹 2022年5月

---

はじめに

1. ロシアをどう理解するか
    - 1) すぐ戦車が出動する国
    - 2) 米国の規範を嫌がる国
  2. ロシア人の気質をどう捉えるか
    - 1) 優しくて頭脳明晰なロシア人
    - 2) 人命を尊重しない人々
    - 3) アナーキーでありながら全体主義的な国民体質
  3. ロシアの産業をどう捉えるか
    - 1) ロシア黎明期の風景
    - 2) 黎明期のロシア企業
    - 3) 「液体産業」国家のロシア
  4. ロシアはウクライナに何を求めたのか
    - 1) 「石油の呪い」が解けないロシア
    - 2) 呪いを解く「ルーブル安」
    - 3) 自暴自棄に秘められたサイン
  5. ロシアに「落とし前」をつけてもらう
    - 1) ルーブル安を導く「経済制裁」
    - 2) ロシア「友引き」作戦
-

## はじめに

ロシアのウクライナ侵攻が止まらない。「とんでもねえことをしやがる」の一言に尽きるが、最近、某衆議院議員から次のメッセージが届いた。

「ウクライナについては、あまりにも情報が偏っているように思います。一方的な正義 v s 悪の構図になると、戦争が長引くばかりです。」

このメッセージには、新しい国際的な枠組みの議論の必要性が示唆されるが、ここではロシアという国について、ドストエフスキー研究者の亀山郁夫名古屋外国語大学学長のインタビュー記事（下記 [http](http://mainichi.jp)）を参照しつつ、学生時代授業をさぼって読んだドストエフスキーとロシアに通った個人的経験を織り交ぜながら考えてみたい。

[ロシア文学者を「絶望」させたプーチン氏の「最後の夢」 | 毎日新聞 \(mainichi.jp\)](http://mainichi.jp)

## 1. ロシアをどう理解するか

### 1) すぐ戦車が出動する国

1993年7月、G7の向こうを張って世界通産省会議が東京で開催された。このとき、主催国であるわが国の通産省は、「ロシア企業」の支援を打ち出した。これで、野村総研はロシアに行く羽目になった。その年の9月のことである。

以降、ロシア企業のリストラ（構造改革）支援を、毎年1社ずつ5年間にわたって行うことになった。1回行けば1~2週間の出張を、5年間で合計30回近くも繰り返しただろうか。

最初の年の9月、初めてモスクワに行ったときは、古めかしいウクライナ・ホテルに泊まった。目の前にモスクワ川が流れ、対岸には通称ホワイトハウス・議事堂があり、その向こうにクレムリン・大統領府のネギ坊主が見える。ある日、その議事堂の前に赤旗がひしめき合い、次第に増えている。そして、戦車が登場した。川の向こうに戦車が続々と集まっているのである。“これはヤバイ、”と思い、予定を切り上げて帰国した。2週間後に再び行ってみると、ウクライナ・ホテルの壁には銃弾の跡が無数にあった。これは、共産党の復活を狙ったグループが赤旗を掲げ、これに対してエリツィンが戦車で排除したものである。

1993年、ソ連が崩壊して2年目、日本のTV放送をよそに街には食料品が溢れ、穏やかな平穏のなかにあるにもかかわらず、局所的な銃撃戦が行われ、いとも簡単に戦車が登場する国だと思った。

### 2) 米国の規範を嫌がる国

初年度の企業改革を支援したのは、M社という、ソ連時代は戦車のトランスミッションを作っていたが需要が激減し、当時は冷蔵庫の生産に切り替えていた企業である。「生産量」は判るが「売上高」という考え方が全くないところから始まって、生産プロセス上での品質管理の概念がない、自らが学校や病院を経営しているためPLとBSに整合

性がない・・・相手経営者たちと徹夜に近い議論を重ねながら、野村総研が出した結論は「部門管理」であった。

はばった言い方をすれば、M社の現状を見極め、M社が実行できるギリギリの改革の提言のつもりであった。これはM社から大変感謝された。そして彼らは「実は、野村総研とは別に、アメリカのマッキンゼーにコンサルを頼んでいました」と続けた。そして「アメリカのコンサルが言うことには、私たちにはとても実行できることではなく、ついて行けませんでした」という。

このことをはっきり覚えているのは、野村総研が感謝されたこともあるが、「ああ、アメリカはまたしても米国流経営の“理想”をロシア企業に押し付けた。MBAごときの教科書を押しつけられたら、誰だってかなわんのだよ」と思ったことである。

現在もこれと同じ調子で、「“理想的”な民主主義」を米国は他国に押し付けているのではないか。こうして、米国が未だに変わっていないことが、世界の混乱を起こしていると思うのだが、いかがだろう。

## 2. ロシア人の気質をどう捉えるか

### 1) 優しくて頭脳明晰なロシア人

このロシア行きを半分は楽しんだ。ドストエフスキーのモスクワの生家に行くことができたし、ペテルブルグでは『罪と罰』のネヴァ川沿いの実際に殺人の舞台となったアパートをエルミタージュ美術館の学芸員に案内してもらったりもした。

ロシアに5年間で合計200日以上も滞在し、政府高官や企業人、街の人など様々な人と会って感じたことは、スラブ人は人懐っこく“優しい”ということである。そして、ロシア語である“インテリゲンチヤ”が多数いて、明晰な頭脳をもつ民族であると思ったことだ。これは、みなさんに是非知ってもらいたいことである。

しかし一方で、共産党時代の名残りなのか、偉い人ほど中味があまりない「饒舌」で人々を惑わす、これには辟易としましたね。そのうえ、市民は「人命を尊重しない」、「集団になると何をしでかすか判らない」ところがある。

### 2) 人命を尊重しない人々

亀山郁夫氏はインタビューのなかで次のように述べている。

「ロシアでは、人命の価値が恐ろしくないがしろにされていると感じます」。

これはロシアを見るうえで重要な視点である。

あるときモスクワ市内を車で移動していると、前の車が突然止まった。しばらく動かないので外に出てみると、何人かの人たちが道路の真ん中で横たわった人を担ぎ上げ、道路端に移動させていた。ロシアの主要道路は片側6車線もあるのが普通だが、信号がろくにないので、人々は幅広い道路を横断していく。そして撥ねられる。しかし、警察の検分なしに、ともかく車が走られるよう怪我人は道路端に置き去りにされるのである。

人命が軽くみられている。これを目撃して以降、この国では絶対に医者にかかるようなことは避けることに心がけた。そのうえ、この国では病院は一般企業が福利厚生として運営し、日本と違って医者の身分は極めて低く見られている。

### 3) アナーキーでありながら全体主義的な国民体質

「(ドストエフスキーがロシアの国民性を見抜いて示した言葉(筆者註))、『神がいなければ、すべては許される』というアナーキーな精神は、ロシア人の精神の闇に深く通じる言葉です」と亀山郁夫氏はインタビューで答える。

ドストエフスキーが生きた時代は、ロシアのアナーキズムが台頭しており、彼はこれと闘っていたとみられる。例えば『白痴』では、「ロシアの自由主義は、現存する社会秩序に対する攻撃ではなく、ロシアそのものに対する憎悪にもとづく攻撃なのです・・・それではロシアという国はどうなるのか・・・」と述べ、どの小説にも登場してくるテーマである。

確かに、ドストエフスキーはロシア国民の暴力的なありようを“これでもか、と見せつけ、その姿が後のサルトルなどの実存主義の系譜に繋がることになった。しかしドストエフスキーは、“実存、を示したが、その先、国民とは何か、国とは何かを問うていたのではないだろうか。

また、亀山郁夫氏はインタビューのなかで次のようにも述べている。

「ロシアの人々の間では、個人は全体のなかにあつてこそ自由だという考えが根強くあります。・・・個人としての自立の意思がとても弱い。・・・このメンタリティーは、当然、政治にも反映され、強力なリーダーを求める傾向が生まれます。ロシアの精神風土において、強大な権力は、地水火風のように自然になじんでいるのです」。

中世の時代、ロシアに住んでいたスラブ人は北欧からきたバイキングの支配下に入り、従順な民族として働くことを余儀なくされ、このことから slave (奴隷) という言葉が生まれたといわれる。スラブ人は、そもそも温厚で優しい民族だからこそ、リーダーを必要としたのか。だからロシアでは、ソ連開放の立役者となったゴルバチョフは国民の人気は全くなく、エリツィンやプーチンのような独裁者が好まれている現実がある。

こうしたロシア人の精神のありようから、独裁者のもとでアナーキーな行動を厭わない。ロシア人は「集団になると何をしでかすか判らない」のである。

あるとき、モスクワの地下鉄で“ネオ・ナチ、と言われる若者集団に出会ったことがある。ある外国人がこれにボコボコにやられたらしい。日本大使館は注意喚起を促したが、こうした集団はどここの国でも多かれ少なかれいるものだが、このロシアの地下鉄集団は妙に怖かった。満州で育ち満州で仕事をしていた義理の親父が、第二次大戦終了後にソ連が満州に侵略して横暴のかぎりをしたことを目の当たりにし、「ともかく、集団になると“ロスケ、はひどい」と言っていたが、このメンタリティーは如何ともしがたいのか。

### 3. ロシアの産業をどう捉えるか

#### 1) ロシア黎明期の風景

1993年にモスクワに初めて行った時、家のシャンデリアや骨とう品、小鳥などが、おばあさん達の手に掲げられ黄昏時の街角で売られていた。この光景は脳裏を離れない。ソ連が崩壊し、収入の道がなくなったからである。鉄道の停車駅では、ガラス細工やお皿などが呼び声高く売られていた。工場の稼働率が上がらず、給料は工場の生産物による現物支給が行われていたからである。もっとも、翌年には、街角には多くの花屋が店を並べ、人々が買い求める姿があった。

1993年、ソ連が崩壊して「ゴススナブ」という全国から農産物や工業製品を一手に集め全国に配分していた国家唯一の組織が、ある日忽然と姿を消した。ここに当時「マフィア」と言われる若者たちが集まり、農産物などの流通を担い、俄然、モスクワは活況を呈した。これは、希望を抱かせるものであった。これを目の当たりにしたとき、不埒なことに、日本でも農協が無くなれば同じことが起ると期待したものである。

しかし若者たちの活躍をよそに、その税金が政府に上がってこなかった。当時のロシア政府高官は、「おそらく4割は税金が納められていないのではないか」と話した。脱税があたり前だったのである。

この問題を解決したのはプーチンの法人税制である。これまで40%の法人税をかけられれば、納税を回避する行動に出る。これをプーチンは13%の税率に下げ、納税率を一挙に高めた。まるで「北風と太陽」のような話である。これは最近15%に上げられたらしい。

#### 2) 黎明期のロシア企業

しかし、税制もさることながら、若者たちの起業を除いて、ロシアには企業が育つ気配がなかった。もっとも、訪問して判ったことだが、ソ連時代から続くエネルギーマッシュというロケットエンジンを開発する立派な企業や、大気汚染すさまじいリャザンの石油化学重工業コンビナートがあり、また客席に座ると床とボディの隙間から外が見えるイリューシン旅客機もあった。こうした従来から存在する重厚長大産業はあった。

しかし、消費財にかかわる産業が育つ気配は見えなかった。

ベラルーシに近いスモレンスクの繊維工場の改革支援をし、下着製品の粗悪さを変えさせることを行った。この会社は、女性社長以下ほぼ女性社員で成り立ち、男性は車の運転手か設備のメンテナンス要員であった。

スモレンスクの企業にかぎらず、ロシアのいずれの企業にも黙々と設備を磨いているメンテナンスおじさん達がいた。だから、政府高官には「工場が稼働していなくても、工場の設備をメンテナンスしている立派な年配従業員の首は切らないでほしい。これからの産業の礎になるのだから」と繰り返しさんざん言ったにもかかわらず、これは実行されなかった。

これは、後に中央アジア諸国の支援を行ったときに、カザフスタンのナザルバエフ大統領に進言したことでもある。しかし、いずれの国もこれが実行できなかったのは、海外からの投資を促す環境整備ができなかったことによる。これはいまでも続いている。

また、イルクーツクに近いクラスノヤルスク市にある巨大なアルミ製造企業も支援した。この企業の最大の問題である資金不足を支援するため日本に電話しようと思ったが、ロシアから通じず、結局、帰国してから通産省に報告することになった。これをすり抜けるように米国のバンカメが融資を決定してしまい、その速さに驚くとともに悔しくもあった。以後、野村総研はロシアに行くときには、衛星通信の「お釜」を背負っていくことになった。

このアルミ企業は巨大なだけあって会計処理に不正があった。これを見つけて野村総研はいち早く退散したが、案の定、社内で対立する双方の銃撃戦があった。

ロシアの企業はこのような体質をもっていたが、しかし、それでも技術に対して無頓着であった訳ではない。

車のホイール製造企業の改革支援では、製品の安定性を確認するために、日本にこれを持ち帰り専門メーカーに見てもらったところ「『巣』がありすぎる」ことが判った。つまりアルミホイールのなかに気泡がたくさんあり、これではホイールの強度が出ないばかりでなく、事故に繋がりやすい。

そこで、このロシア企業技術者を日本に呼び、日本のホイールメーカーで短期研修させた。この間ロシア技術者が、予定にない航空機関連企業が集積する各務原市に行ったので、公安に呼び出され大目玉をくらった。日本の公安がロシア人を尾行する時代であった。しかしロシアの技術者は、何かを得てロシアに帰ったようで、受け入れてくれた日本企業の方も、ロシア人技術者を「なかなかいいね」と評価していた。

日本のロシア大使館の職員からは盛んに接触があり、何がしかのインテリジェンスを得ようとしていたし、そしてホイール企業のような日ロの技術交流が続いていたら、ロシアにはその「インテリゲンチヤ」能力を生かした技術企業が多数生まれ、産業が育っていたであろう。

ロシアの企業支援ではさまざまなことが起り、野村総研のメンバーは「まるでNHK番組の『プロジェクトX』のようだな」と笑った。

### 3)「液体産業」国家のロシア

その後、結局、ロシアは産業らしい産業を育てることができず、エネルギー資源に依存してしまった。このツケは大きい。

ロシアに通っていた頃、ロシアのウオッカ「生産量」は年間10億キロリットルであったが、実際の「消費量」は20億キロリットルあると言われていた。10億キロリットルは密造酒で、なかにはメチルで目が潰れた人も多かったようだ。1993年ごろは、ロシアの国税の40%は酒税が占めていたのである。

ドストエフスキーの時代も、ウオッカからの国税収入が国の財政の半分であったらしい。ロシア国民は「まともな生活」を送ろうと思ったら、ウオッカの瓶を抱えていることが不可欠なのである。

しかし、いや、だから、ロシアにはこれといった産業は育っていないのである。

ロシア政府の歳入の 40%は、昔は「ウオッカ」が占め、今では「石油」収入に置き換わったにすぎない。要するに「液体」に依存する国なのである。小さな国ならいざしらず、まともな産業がなく、これでは「パワー」が出るはずもない。

ロシアはすでに人口減少国家となり、一人当たり GDP は 10 年前に 1 万ドルを達成したがそれ以降は足踏みを続けたため、ウクライナより高く中国とほぼ同等であるものの、ポーランドやルーマニアよりも低い状況になってしまった。

#### 4. ロシアはウクライナに何を求めたのか

##### 1) 「石油の呪い」が解けないロシア

ロシアに未だ産業らしい産業が育っていないのは、液体である「石油の呪い」に縛られ、それがアダとなっていることによる。

ロシアはこれまで何度も製造業の育成にトライしてきたが、ことごとく失敗している。石油の輸出が増えれば、その外貨をもとに製品輸入が増える。製品輸入が増えれば、国民は国内製品に見向きもしなくなるので、国内製造業が育たないのである。

ロシアに通っている頃、街には外国車ばかりが走っていた。道路わきでボンネットを開けて「エンコ」の原因を調べているのはロシア国産車であった。ビールも同様で、国産品は飲めた代物ではないので、すべて外国製品であった。西洋漬けなのである。

ロシアには「勝者の呪い」ならぬ「石油の呪い」があり、それが続いている。

##### 2) 呪いを解く「ルーブル安」

この呪いを解くひとつの方法が、「ルーブル安」によって国内に「輸入代替」産業を育成することである。

ロシアでは 2014 年以降、石油価格が低迷してルーブル安となったため輸入が減り、その代替として国内に食品、化学、医薬品産業がにわか立ちあがったという。つまり、「石油の呪い」を解くひとつの方法が「ルーブル安」の実現にある。

しかし、このルーブルは石油価格に連動している。ロシアでは石油が強いため、ルーブルも高止まりする傾向にある。

だが、「経済制裁」はこの連動を断ち切る力があるらしい。2018 年、シリア問題に関連した米国によるロシア追加経済制裁では、石油価格の上昇にもかかわらずルーブルが低価するという現象がみられたという。(以上、田畑伸一郎『ロシア経済の強さと弱さ』2020 年北海道大学にもとづく)

つまりルーブル安が起れば、国内に「輸入代替」産業がロシアに興る。このルーブル

を低価に導くために、石油との連動を断ち切る経済制裁があると考えべきなのだろう。

### 3) 自暴自棄に秘められたサイン

ロシアのウクライナ侵攻の背景には、ロシア国内にまともな国内産業を育てられず、足腰が脆弱であったことにあるように思える。

「石油の呪い」を甘受してきたいわば「自業自得」とでもいうべきもの、これを打破するために「自暴自棄」となり、ウクライナに攻め込んだということである。

世の東西を問わず戦争が起るのは、おためごかしの「錦の御旗」にあるのではなく、多かれ少なかれ「利権」の獲得にある。今回のウクライナ侵攻も、ドネツク州のロシア人を守るという名目のもと、石炭と製鉄所、場合によっては造船業も手に入れ、既得権益化したクリミア半島に連なる海岸線を確保することが目的である考えられる。

しかし、ロシアの産業経済の歴史的文脈からいえば、ここにはある種のサインがあるとも見ることができる。「俺の国をルーブル安にしてくれ」。何度も実施した製造業育成がことごとく失敗したのは「石油の呪い」があるため、自ら解けないこの呪縛を「自暴自棄」というみっともない手段を通じて解決しようとしていることである。

もしそうだとしたら、それはロシア国内に産業を育てられなかった「三流国」の姿を自ら世界に晒し、自らのツケを、領土の侵略により誤魔化そうとしていることになる。

自業自得から自暴自棄になり、その対象となったウクライナはたまったものではない。

## 5. ロシアに「落とし前」をつけてもらう

### 1) ルーブル安を導く「経済制裁」

ロシアが自ら三流国であることを世に知らせることは勝手だが、あろうことか凶暴な国の姿を顔わにしてしまった。この落とし前は、自らつけなければならないだろう。

侵攻を終息しウクライナに謝罪と償いをするのはもちろん、世界経済の混乱に対し落とし前をつける必要があるのである。

しかし、この国はそれができるだろうか。すでに述べたように、独裁者を好み、人命を尊重せず、優しいがアナーキーな精神に満ちている国民がいる国なのである。そのうえ、石油に依存しながらも「大国」であると思っている。

こうした国を覚醒させるためには、「実はロシアは三流国だった」ことをロシア国民に知らせることが必要だろう。そのため、いま経済制裁が行われている。

しかし、ドイツは原発を放棄しロシアの液体産業に依存していたため、経済制裁に腰が引けている。わが国でも、ドイツに見習って原発が抑制されたため、電力料金が値上がりし始め国民がざわついている。

このようにロシアに対する経済制裁は、ブーメランのように自国に跳ね返っていて、「しまりのない」ものになっている。

しかし、経済制裁はロシア国民を痛めつけるのではなく、ロシアの「石油の呪い」



を解いて産業を育てる素地をつくることを目的とする、と明確にしたらどうだろう。

すでに述べたように、ルーブル安が起れば、国内に“輸入代替、産業がロシア国内に興る。ロシアに対する経済制裁は、プーチンに対する怒りであり、ルーブルを低価に導くためにあると考えるべきなのだろう。そのため、ロシアの石油収入を徹底的に貶め、あらゆる手段を使ってルーブルの価値を下げる、この一点に訴求した制裁が必要となる。

間違っではないいけないのは、ロシア国民をいじめることではない。経済制裁をするのは、プーチンを厳しく糾弾するとともに、自分では「石油の呪い」が解けないロシアに対して、世界が協力してロシア経済を徹底的に駄目にして、ルーブル安を演出し呪縛を解除しロシアに自国産業が育つ環境を用意してあげることである。

だから、誰かプーチンに言ってやってはくれないだろうか。「経済制裁でルーブル安にしてあげるので、ウクライナの“侵略、はやめろ」と。

## 2)ロシア「友引き」作戦

こうした経済制裁はロシア国民に大きな痛みを与えることになるが、これはウクライナ侵攻でロシア自らが望んだことである。

加えて、ロシアが冷戦後になっても気づくことがなかった「三等国」意識をもってもらい、これから真面目に地道に世界にかかわってもらうようにすることを考えたい。ウクライナ侵攻は、プーチンが妄想として持っている「大国意識」が禍となっている。

必要なことは、ロシアから安保理常任理事国、G20などの資格をはく奪することである。ロシアがこうした立場にいることが、プーチンやロシア国民に「大国意識」を持たせている原因と思えるからである。

しかしこの流れも、途上国の壁に阻まれている。

実は、日本もG7などのメンバーから外れるべきだと、かねがね思っている。それは、この20年間、わが国は「先進国」意識に胡坐をかき、「陽、没する国」をひた走っている“自覚、がわが国全体にないからである。こうした事態に対処するためには、日本はG7から自発的に離脱し、すでに「三流国」であることを国民に宣言して、国民一人一人に“火、がつくことを喚起する必要があると思っている。G7のメンバーなど、それを欲しがっている国にやっしまえばいい。

ロシアの世界的立場のはく奪、これを先に進めるためには、日本が自発的にG7などから離脱する宣言をして、ロシアにも「一緒に降りましょう」と声をかけたらどうだろうか。友だち作戦ならぬ「友引き」作戦である。

ただ、わが国が先進国ではないからG7を降りる、といっても誰も納得しないだろう。しかし、ウクライナ侵攻で、もしロシアが化学兵器を使うことがあれば、わが国はウクライナ国民に対して「落とし前」をつけなければならなくなる。サリンである。

1995年わが国でサリン事件があったとき、多くのモスクワの人に言われた。

「日本はまた、ひどいことをやってくれたね。むかしは特攻によって“自爆テロ、の

手段を世界に広め、今度は「サリン」でテロに新しい手口を教えた。日本はこの落とし前をどうつけるのかね。」

わが国は、この国家転覆を企てたサリン事件の団体に対し、生き延びることを放っている国である。そろそろ「落とし前」をつけてもいいのではないか。

だから日本がG7を離脱する理由は、「先進国でないから」と「ウクライナ国民に多大な迷惑をかけたから」となる。そして、ロシアとともに世界の檜舞台から一度退場する道筋をつける。ロシアがこれから本気で「地道」に落とし前をつける気持ちにさせるために、「大国意識」の払拭を日本も一緒にやるのである。

この延長上に、安保理の改革がある。ロシア外しが、他の国が無傷であっては成功しない。日本は、常任理事国になりたいなどと言わず、むしろ、ロシアの「友引き」を契機としてこの古い戦後の枠組みに揺さぶりをかけたらどうだろう。わが国の首相が、いつまでも繰り返し「国際社会に協調して」などと言って恥ずかしい追随をしている場合ではない。

ウクライナにわが国が「本当」の支援をするためには、冷戦後の新しい世界秩序確立を行うに際し、教条主義的な米国のリードに依存すると世界が割れる可能性が高いので、生半可な民主主義国であるからこそわが国がイニシアティブを取る覚悟をもつ、これが途上国を含めたコンセンサスをつくれる一つの道であると思うのである。これが、これまでの世界秩序の枠組みの解体となり、冷戦後にふさわしい「組み直し」につながることを期待したい。

=====

玉田 樹 Tamada, tatsuru

株ふるさと回帰総合政策研究所（ふるさと総研）

URL <http://www.furusatosouken.com/>

E-Mail [t-tamada00@nifty.com](mailto:t-tamada00@nifty.com);

=====